

## 戸木田嘉久君の人と業績

黒川 俊雄

戸木田嘉久君と私が知りあつたのは、彼がまだ九州産業労働科学研究所（九産労）の事務局員として活躍していた頃からであるから、随分長い間のつきあいである。九産労は、九州大学の森耕二郎教授を所長にして、今は亡き正田誠一教授などを理事として、九州、山口の労働組合の共同調査機関として活発な活動を展開し、九州ではもとより、日本全国で信頼される権威ある労働運動の研究機関として注目されるようになった。若い戸木田君は、そこで、正田教授に絶大な信頼を得ている事務局員として働いておられたのであり、私のように、はじめから大に入つて研究者となつてしまつたような者とは一味ちがう魅力をもつた人物であつた。

彼は何事にも献身的に取り組み、しかも現実のきびしさを十分に知って事を処理しながら、原則をあくまでつらぬこうとする態度を崩さず、しかもマルクス、エンゲルス、レーニンなどの文献をよく読んで、現実を分析し、総合するために必要な理論を身につけているすぐれた理論家であるばかりでなく、労働運動に密着した得がたい実践的な理論家である。その面目躍如たる労作が『労働組合はどう変るか』（三一新書）ではないかと思う。総評の炭労闘争、とくに三池闘争に深くかわった彼が書いたこの本は、私にとってはきわめて感動的であつたし、労働運動研究へ私をいつそうかりたてる強い刺激を与えてくれた。

実際に、総評の炭労闘争がまださかんな頃、やはり今は亡き堀江正規氏のもとで、正田誠一氏、三好宏一氏とともに、私が戸木田君といっしょに炭労の綱領草案の作成にあたつたとき、彼は、私とちがつて遠く九州から東京まで通い、おそらく疲労もはなはだしかったと思われるが、実に精神的にしかも確実に仕事をすすめていったのに驚かされた。炭労はこの綱領を置き去りにして「政策転換（政転）闘争」にはしり「合理化」攻撃によって後退に後退を重ねていくことになつたのであるが、まさにこの炭鉱の「合理化」と合理化反対闘争に深くかわるることによつて彼はその「合理化」理論をきたえあげてきたのだと思う。そしてその理論を、最近の情報化、ME化という新しい状況のもとで発展させることによつて今日的諸問題をすべく提起している。

また、彼は、現代の労働者階級の分析をすすめて「変革主体形成」についてするどい問題提

起をおこなっている。そして国家独占資本主義の「統合条件」を強調する議論を批判することによって、この種の議論が国家独占資本主義の資本蓄積の過程が生み出す基本的矛盾の展開を正確にとらえていないこと、などを指摘している点は、まことに的確である。ただ、労働者階級の貧困化の具体的形態の把握の重要性を強調するにとどまらず、国家独占資本主義の「統合化」作用が効を奏する結果となっている労働者大衆の階級的未成熟を認識し、それを克服して階級成長をいかにして促進するかという課題にとりくむことが現在重要なのではなからうか。この点、マルクスの「フランスにおける階級闘争」にはじまる三部作が、フランスの労働者大衆の階級的未成熟さとの関連で指導者たちの批判をおこない、敗北のなかから、階級的成長と勝利への展望をきりひらく教訓をひきだしていることは、大いに学びとる必要があると思う。

（慶応義塾大学教授）

◇現代労働組合研究会のHPへ（TOP）